

# 愛珠

## 想い出ずるままに (三)

中 村 道 子



### (三) 愛珠へ転任発令前後の心労

昭和十六年四月一日には、西六小学校も、入学式を行なった。

式後校長室の来客が、退出せられたときを見計らって、私は学校へ行った。新入児の保護者会開催の打ち合わせを園長としてから、会計事務の整理に係の先生としよう校長室を出たとき、電話のベルが鳴ったので、直ぐ側の受話器を私は取った。

「中村さんはおられますか」「私ですが」「ちょうどよかったです!!

ご苦勞ですが、明後日の午後一時半に泉布観<sup>せんぷくわん</sup>へ来て下さい。間違はなく来て下さい」と切れた。「何だろう」、教育部に呼び出されるようなことはしていないが、何だろうかと思ひ、後の校長室の戸を開けて、「先生!! 教育部から電話で、明後日の午後一時半

に泉布観へ来るようにと聞いていますが」「何? 教育部からか?」「私は教育部から呼びつけられるようなことは、していないのに、不審ですわ」「そうか!! 転勤と違うか?」「来いというなら行かねばならぬ。とにかく行って来なさい。用事がすんだら直ぐここへ帰って来なさい」といわれて、不審を抱きながら幼稚園へ帰った。

退出時刻の四時も過ぎていたから、先生たちは皆帰宅して誰もおられなかった。一人ぼつねんと、腰をおろし、先刻の電話は何だろうと、また不審に思った。一人席に坐って、向こうの塗板を見詰めていたら、園長席の机の真上の天井から、ポタポタ水が落ちたので何かと見ていると、グツグツグツグツと量が増し、コップ一杯半はある、動物性のものの臭気があった。おばさんと呼んで、「何だろうか」と尋ねたら、「あっ!! 狸のと違いますか!」

「まだいるの!! 嫌やなァ、気味悪く一層嫌になり、「思っても仕方がない、当たって砕けろだ」と小声でいって、帰り仕度をして門を出た。家では何もいわなかった。家人が不安を感じてはいけないと思い、両親が亡くなってからは、よけい外のことはおもしろいことのほかは、一切何もいわない、まして自分の勤めことは、善悪不問、話さないことにしていたから、今日もいつものように、笑いながらは行って行った。

四月三日は神武天皇祭で休園だから、午後幼稚園へ行った。明日の始業式には特別の用意はいらない。

幼稚園の向かいの家は、芸者の屋形で四人程置いていた。粹な構えで表の格子に浪華踊りと書いたポスターが、一枚下がっている。この通りの、すなわち砂場筋から裏通りを抜けて、気分を転換したいと、九軒の桜の通りへ出た。

三間道路に、二尺程の高さに切石を積み重ねて土堤を作り、それが桜の並木になって二丁程続き、木の下の方々にボンボリを建てて、一層情趣を添えている。花はまだ二分咲きであるが、枝にもボンボリが下がり、金紙の短冊が風にヒラヒラ回っている。小石を敷いた地面には、石の間から小草が生えていて美しい。

並木の中央辺りが、夕霧や伊左衛門が遊んだ、お茶屋の吉田屋の正門で、新町中で一番大きく、他のお茶屋と変わった構えで豪

壮であった。二十間たらずの間口は、二間の門を左右に挟んで、格子をはめた何かの部屋になっていて、浪華踊りのポスターが五、六枚下がっている。中に誰かがピアノで小唄を弾いているらしい。門の扉は左右に開かれ、大玄関の前の広い敷石がチラッと見え、突き当たりの一間余りの勝手口には、ゴロゴロと鳴る障子戸が締められていた。この前庭には全部磨きをかけた石が敷き詰められ、鴻池の玄関よりなお広い。桜も満開になり、浪華踊りも月の中頃になったら、また見に来ようと思って家路に着いた。

翌日は午前中に始業式をすませ、園長にも挨拶して、泉布観へ行った。会場には、ちょうど十分前だから、大分おおぜいの人が行って、六、七人女の人もいた。四、五人は見知りの人だったから、「これは何ですか? 悪いことと違いますか?」誰も何もいわない。西九條幼稚園の富園長の隣りが空いていたから、「掛けさせて貰いますわ」といって坐った。富先生は小さい声で、「今日ここで辞令が出るのですと、今朝新聞記者が来ていました。貴女は愛珠ですと」「そんなことがあるものですか、それは先生ですわ」「いいえ貴女が愛珠で、私は御津ですと、そんなことをいうてなされたから、間違いはないと思います。張間さんは道仁、園城寺さんは栄、岡田さんは西九條ですと」そう聞けば一月の終わり頃、美術館の地下室と呼ばれ、督学課長、学務課長、体育課長、人事課長の各課長が並んでいる大きいテーブルの前に、私は

腰をかけ、次々に問われるままに返事したことを思い出していたら、富先生が、「美術館のことは、今日の考査でしてん」と、つけたして下さったから、「そうだったのか」と思い当たった。園長の発令とすると、私は西九條か、栄だろうが、栄は円城寺さんが園長であるなら結構ですといわれたことを、美術館でちょっと聞いたから、その方には懸念しなかった。何分事変最中のこととて、悪いことでなくてよかったと思つた。ちょうどそのとき司会の先生が現われ、続いて督学課長から、各校園長へ辞令の伝達があつて、思いがけなく、愛珠幼稚園保姆兼園長に任ずとの辞令を貰つた。そして誰はこの幼稚園だということもわかつた。私はこの荷は重過ぎると思ひながら、皆と別れた。

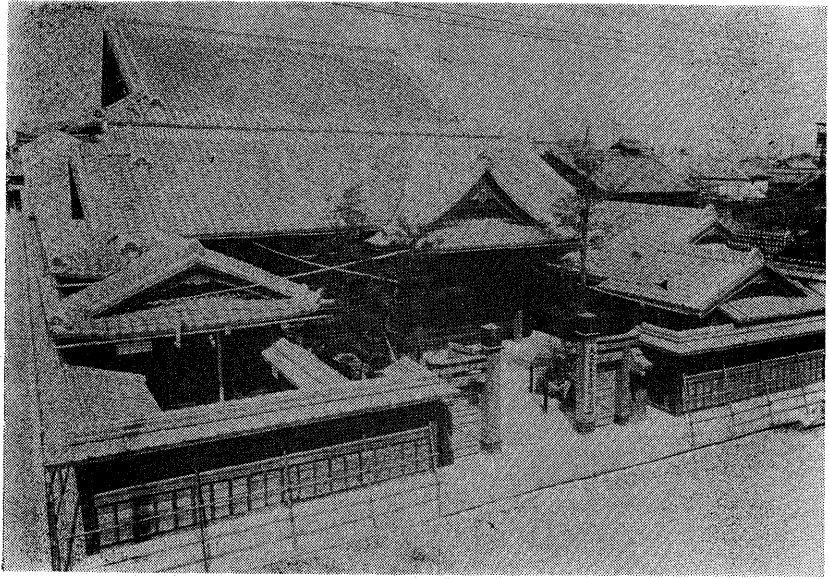
一昨日、用事がすめば、ここへ真直ぐ帰れといわれていたから、西六学校へ帰り、校長にこのことをいった。「ふうん!! 発令か!!」といいながら、辞令を受け取り、それを開けて見ながら「愛珠やがなア!!」、突然に大きな声で、隣の部屋の教頭に、「桜井君、中村さんは愛珠幼稚園へ転任や、よかつたなア!!」

「愛珠でしたか!! よかつたですなア!!」  
二人は心から喜んで下さった。私は嫌ではなかつたが、手放して嬉しいとは思わなかつた。荷が重いと思つて、不安であつた。

「こうなつたら、この幼稚園の段取りを早く決め、先方の主任とも打ち合せて、赴任するまでに片付けて置かんと、手が回ら

んようになると困るで」と、注意して下さった。私が幼稚園へ帰り、皆にこのことをいうと、一同は口々におめでとうといひながら、そやけど私らは困つたなアと嘆息した。紙一枚で動かねばならぬ私らは、お互いに平素から腹を割って置きましょう、といった。以前は転動しても、大体行先がわかつていたから、不安はなかつたが、このたびは、大阪の中心地であり、経験のなかつた環境であつたから、不安で仕方がなく、明日の入園式の通知は、以前からしてあつたから、皆で帰ることとして幼稚園を出た。私が宅へ着くと、妹は待つていたといわぬばかりに、玄関まで来て、「姉さん!! よかつたなア、愛珠やそうで!!」「どうして知つてゐるの」「原谷先生が電報を下さつたので知つたので、それこの通り」と、電報を仏壇から持つて来た。見れば、愛珠へ栄転おめでとうと、書いてある。「まア原谷先生は、どうして早よう知りはつたんやろう」驚いているとき、夕刊が来て、移動の記事を載せていた。

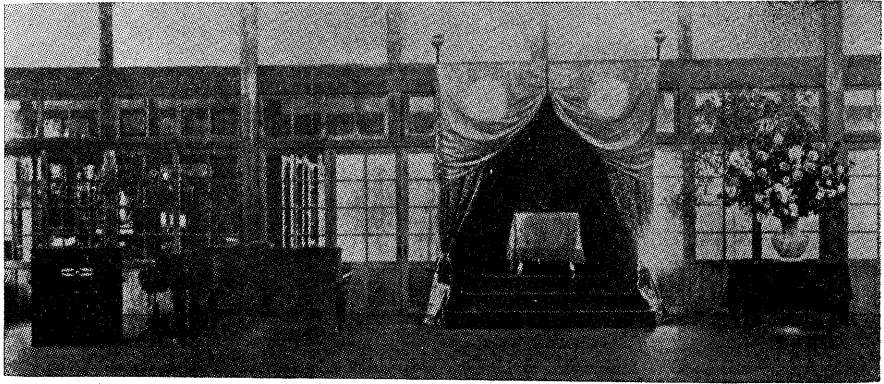
翌日幼稚園へ行くと、八時半にはもう二年保育組が大分来ていて、新担任の荒木先生と遊んでいた。「大きい組になっておめでとう」といったら、どの子も嬉しそうに笑っている。そろそろ登園して来る新入児も保護者連れで、それぞれ受け付けて貰つて各室にはいり、十時の合図で担任に引卒せられて遊戯室に集まり、嬉しそうに並んだ。そして型の通り入園式が終わつたのである。



明治34年3月 園舎竣工当時の全景

この日午後愛珠園から、電話があつて、十日がここの入園式故、それに間に合わせて来てほしいことと、それまでの用事はしているが、その間の煩わしいことについては、指示してほしいと依頼して来た。私は愛珠へ行くのは嫌であつた。

発令以来今日まで、そここの親しい友だちや、知人から交々受けた挨拶は、喜び、同情、激励などで、それを総合すると次の言葉にしばられた。学校区内は、非常にむずかしく、なかなか骨が折れること、母の会と後援会が対立して、母の会の幹事の中には、市会議員の夫人がいて、主人から役所の理事に話して貰つたり、阪大の教授の夫人や、要路の人々と親しい知己を持つ者、それにそれらのとりまき連もいて、こうした人たちが、従来の後援会の会長や、副会長に対立し、今期退職した園長がこの母の会を作り、将来は母の会一本にして、全部後援を依頼する意向らしいこと、後援会長は、現在弁護士であるが、元はそうそうたる代議士で、副会長は東区議員をしていて、会長が忙しいものだから、後援事務はほとんどこの人に依頼していることを聞くと共に、この中間の人たちもいて、じつとこの姿を見ているようで、区内には意見の渦ができているらしかった。このため、教育部でも少なからず気をつかつて、次の園長には、政治性のない人に来てもらうといっているという、噂も聞いた。



園舎竣成と同時にできた組立式奉安所 中久留文部技師案

私の荷物といって  
も、何もなかった。

公文書は永年の物  
や、保存期間のある  
ものは、それぞれ区  
別して綴じていたか  
ら、もうできたも同  
然で、次席の人にこ  
とづければよいだけ  
で、やっと決心が着  
いたから、放課後こ  
の職員室で、朝夕を  
共にした可愛いこれ  
らの人々と、心の碎  
けたお判れ会をした  
のである。発測とし  
た若いこの人たち  
は、やがて元気にそ  
れぞれ保育界に羽ば  
たくことだろう。

私は園長に、明日

園児一同に挨拶して、九時に出発することを電話した。そのとき  
園長は、「愛珠まで自分は送る」といって下さったのである。これ  
と共に愛珠へも電話をしたら、「当方は母の会の幹事が三人迎え  
に行きます」といって来たから、驚いて、また園長に電話する  
と、「えらいことや、それなら西六も婦人会の人を呼んで、愛珠  
まで送って貰おう、よし!!」と切れた。

今日は四月八日、いよいよ愛珠へ赴任の日である。私は絞りの  
付いた羽織を着て、西六幼稚園への最後の出勤をした。子どもら  
は八時頃には、大方登園していた。愛珠から電話があつて、今日  
動車で幹事が三人お迎えに出ますといつて来たので、園長に電話  
すると共に子どもを遊戯室に集めた。そして、今日の集まりの意  
味を子どもらに話したら、一年保育児は「ふうん!! そんなら直  
ぐ帰って来てちょうだいや」「もう西六へ帰れへんのん?」「ふう  
ん!!」「なんや!!」「そやけどまた帰って来てちょうだいや!!」と、  
口々にいった。黙っている子どももいた。

車は着いたらしい。私が子どもらと話している間、西六婦人会  
の人たちは、それぞれ紋付を着て、五、六人が応接室で、愛珠の  
人たちと挨拶をし、園長が中心になっての交歓のようすだった。  
私も保母さんたちや、小使さんらに、後を頼んで応接室へはい  
り、始めての挨拶をした。

その間に幼児らは、廊下や門内に出て来て、私らの出るのを待



私の赴任当時車寄側にあった桜

つ有様だったから、園長にこのことを話し、いよいよ出発することとした。そして一同にさよならさよなら、といいながら手を振って、おとも子どもも笑いながら、別れた。私は愛珠の幹事方と、同じ車に乗ったが、私の胸の中には、退職届を入れることを忘れなかった。池田さんや、砂原さんは、園長と同じ後の車に乗って、私を送って下さった。車は愛珠の門前に止まった。門から

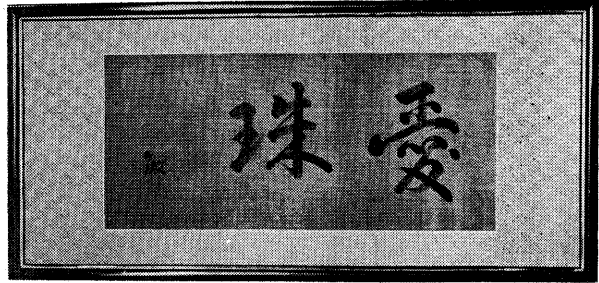
車寄まで、石畳を前にして、両側に婦人会の人たちや、保護者の一部の人たちが並び、その前に幼児が一列に整列していたので、私は門に一步はいり、一礼して、それから微笑みながら、子どもの間を足速に玄関に昇り、招ぜられるままに、応接室にはいった。西六

の半分位の広さで、別の人たちがいたので、一人一人に挨拶し、今西園長や西六の人たちも来て、皆で交歓した。お茶とお菓子をいただき、暫くしてから、今西園長は市役所へ行くといわれ、他の人たちも家路につかれた。

大谷さんもほっとしたらしく、「ここが先生の席です」といって、次の園長室の机を指した。その机は総桐であるが、年を大分経た、代々の園長用であるらしかった。窓越しに蘇鉄の樹の影が見えるから、立って窓辺に出ると、先程通った、門や、車寄せまで作られた清麗な石畳が見え、そのとき気の付かなかった、桜が枝を張って、花をたくさんつけている、満開には少し早いですが、咲けば美しかろう。

翌日は愛珠の入園式で、始めて幼児や保護者の人たちと逢ったが、子どもはどことも同じで皆可愛らしかった。この日式後、東区役所や愛日小学校、ならびに教育関係の役員方の家へ挨拶に行つたが、いずれも職業に応じて、構えは異なっていたが、堂々たるもので、どうしてもこの中を歩まねばならぬと覚悟をした。これらの中には、直接主人が来て下さった人あり、執事といわれている人、昔ながらの番頭や、女中頭などが応対に出られた。大阪市の経済の三分の一は、この東区で持っている、何かのときに、前園長がいつておられたことを思い出した。

私は来る十五日に予定されている、後援会と母の会の連合歓迎



#### 額 室 の 接 應

会に、続いて行なわれる本年度の、会則審議と、事業の予定協議について考えると共に、いかに運ぶべきかと思つた。無難であれかすと祈らずにはいられた。長田さんについては、今日まで来られない。

以前から作られている後援会の中に、給食事業として母の会の活動を入れれば、合体するのだがなァ——。幼稚園としては各部門から、いろいろな形で後援していただければ助かるのに、二つが対立するとは困つたこと

だ、仕事の上では甲乙はなく、大切な必要なものであるのに——。十五日が来て、予定の午後、両会の幹事が十四、五人集まり、私の着任を心から喜んで下さつた。長田さんとははじめて逢つて挨拶した。一同は鶴屋八幡のお菓子でお茶をいただいたが、鶴屋八幡は今中さんといって、ご主人は元後援会の会計をして下さつていたというが、今日奥さんは、母の会の幹事として、出席せられていた。歓迎会も終わつて、次の課題に移つた。

私は笑いながら、「幼稚園の後援は、皆さまにお世話になることですから、新年度でもあり、子どもさんを中心とした原案を作つて、謄写してお目につけて、十分にご審議を願つた上で、決定致したいと存じまして書いておりましたが、毎日雑用に追われ通しで、もう少し未だできていませぬので申訳ありませんがもう一度ご案内を致しますから、ご厄介でしょうがもう一度お出かけいただきたいと存じます。申訳ありませんがお願い致します」といった。この日の行事はこれで終わり、一同は各自散会することとした。私が園長室に帰つたとき、主席保母が来て、「もうすみましたかと、案じる気配だったが、私が笑つていたから、安心したように職員室へ帰つた。

一人になつた私は、座席についてから、誰にいうとなく一人語り一人聞いて、会得するように頷づいていた。幼稚園の後援は、保護者各自がして下さるので、会がするのではない、ますますそれが糾合されて会と名づけられたもので、同じ性格の会が幼稚園を援助するのに、対抗的にせず、不即不離で、仕事は分担して、一本になり、あたかも一輪の花になってほしい。この願いを中心として、従前の会則を見ながら鉛筆を走らせ、母の会には会則の書物はなかったので、大意を共に織り込んで原案を仕上げ、印刷して、五月二十四日午後一時に再び臺の部屋で理事会を開くことを通知した。

二十四日が到来し、内藤後援会長をはじめ、副会長や、母の会側も、それぞれ来られたから、一時半に始めた。私は前回の延期を詫び、印刷物はあらかじめ配布して、目を通して貰っていたから、直ちに審議にはいった。

「この印刷物を見せていただきますと、これでは母の会はもう無いことになりましたな」随分お世話をしましたが、それらは皆無駄だったようで、母の会を認めてもらっちゃいけませんね」「いいえ、母の会が、いろいろお世話下さったことは、十分に感謝しているのです、今後も大いにしていただきたいのです。女の手のいるときには、ご婦人方の手をお借りし、仕事の状態によっては男の方の手を煩わして、ご援助を願います。渾然一体となって後援を願いたいのです。ここで後援会と申しましても、従前の会の再現ではなく、全然違います。会名を変えるなら、本日変えても結構だと思います」「この会則は後援会のことばかりで、全く母の会をお認めになっていませんね」「大いに認識して、感謝しているのです。私は給食を主体にしません。全部を包含していますから——、一本にしたから、母の会単独のものと違います。事業の中では給食をうたっております」「全然母の会を認めていない」「後援会としたから、従来のもと同じに考えられていると思いますが、何でしたら会名のご協議を今日致しなくても結構ですが——」「何とおっしゃっても、母の会を認めてもらえません」一

瞬皆黙った。私はちょっと黙って、きつとしていった。

「何時までここにいるかわかりませんが、私のいる限り、この会則で園を後援していただきたいと存じます」ちょうどこのとき、緊急電話が来たので、私は電話室に行った。用事をすませ、遊戯室を通り抜けた処で、母の会の役員が一団となって会場から出て来られたので、「どうされましたか、お茶を入れておりますから」といったが、「皆はこれで、おいとまします」と一人がいつて、他は皆、黙って門の方へ歩を進める。私は「そうですか」といつて、見送ろうと後に続いたが、別れるとき、「ご苦勞さまでした。さようなら——」といつた。

会場へ帰ったとき、内藤先生と長田さんが、二人だけおられた。「他の方はどうされましたか」とたずねると、「帰りました」「そうですか、先程も申したように、この会則で、なにとぞ幼稚園の後援をお願いします」といつたとき、内藤先生は、黙って頷づかれ、長田さんは、「私は喫驚した!!あんたは、思い切ったことをいうなアと思った」といわれた。私は繰り返して、この会則で後援を、お願いしたいといつた。

次いで総会の日、選挙の結果、会長は内藤先生に、副会長は長田さんに、会計には西田さんに、各々依頼して、保護者への通信連絡には、総て幼稚園名を用い、会名は一切使わなかった。